ユーゴー　　豊島与志雄 訳

レ・ミゼラブル I

世界名作全集　14　　筑摩書房

世界名作全集　14

レ・ミゼラブル　I

昭和35年2月25日　初版発行

定価　240円

訳者　豊島与志雄

発行者　古田晁

東京都千代田区神田小川町 2—8

株式会社　筑摩書房

© 1960

目次

序

第一部　ファンティーヌ

第一編　正しき人

一　ミリエル氏……八
二　ミリエル氏ビヤンヴニュ閣下となる……一〇
三　良司教に難司教区……一五
四　言葉にふさわしい行ない……一七
五　ビヤンヴニュ閣下長く同じ法衣を用う……二四
六　司教の家の守護者……二六
七　クラヴァット……三一
八　酔後の哲学……三四
九　妹の語りたる兄……三八
十　司教未知の光明に面す……四二
十一　制限……五三
十二　ビヤンヴニュ閣下の孤独……五八
十三　彼の信仰……六〇
十四　彼の思想……六四

第二編　墜落

一　終日歩き通した日の夜……六七
二　知恵に対して用心の勧告……七七
三　雄々しき服従……八一
四　ポンタルリエのチーズ製造所の話……八六
五　静穏……八九
六　ジャン・ヴァルジャン……九一

七　絶望のどん底……九六
八　海洋と闘夜……一〇三
九　新たな被害……一〇五
十　眼を覚した男……一〇六
十一　彼の所業……一〇九
十二　司教の働き……一一三
十三　ブティー・ジェルヴェー……一一五

第三編　千八百十七年のこと

一　千八百十七年……一二四
二　二重の四部合奏……一二九
三　四人に四人……一三三
四　トロミエス上機嫌にてスペインの唄を歌う……一三七
五　ボンバルダ料理店……一三九
六　うぬぼれの一章……一四二
七　トロミエスの知恵……一四三
八　馬の死……一四八
九　歓楽のおもしろき終局……一五一

第四編　委託は時に放棄となる

一　母と母との出会い……一五四
二　怪しき二人に関する初稿……一六三
三　アルーエット……一六五

第五編　下降

一　黒飾玉の製法改良の話……一六八
二　マドレーヌ……一六九
三　ラフィット銀行への預金額……一七二
四　喪服のマドレーヌ氏……一七五
五　地平に仄めく閃光……一七七
六　フォーシュルヴァンじいさん……一八三
七　パリーにてフォーシュルヴァン庭番となる……一八五
八　ヴィクチュルニヤン夫人三十五　フランをもって貞操を探る……一八七
九　ヴィクチュルニヤン夫人の成功……一八九
十　成功の続き……一九二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

十一　キリストわれらを救い給う……一九七
十二　パマタボア氏の遊惰……一九八
十三　市内警察の若干問題の解決……二〇〇
第六編　ジャヴェル
一　安息のはじめ……二一〇
二　ジャン変じてシャンとなる話……二一三
第七編　シャンマティユー事件
一　サンプリス修道女……二二二
二　スコーフレール親方の烱眼……二二五
三　脳裡の暴風雨……二二九
四　睡眠中に現われたる苦悶の象……二四七
五　故障……二五一
六　サンプリス修道女の試錬……二六一
七　到着せる旅客ただちに出発の準備をなす……二六八
八　好意の入場許可……二七二
九　罪状決定中の場面……二七五
十　否認の様式……二八一
十一　シャンマティユーますます驚く……二八八
第八編　反撃
一　マドレーヌ氏の頭髪を映せし鏡……二九二
二　楽しきファンティーヌ……二九五
三　満足なるジャヴェル……二九九
四　官憲再び権力を振う……三〇二
五　ふさわしき墳墓……三〇六
第二部　コゼット
第一編　ワーテルロー
一　ニヴェルから来る道にあるもの……三一二
二　ウーゴモン……三一五
三　千八百十五年六月十八日……三一九
四　A……三二二

五　戦争の暗雲……三二四
六　午後四時……三二六
七　上機嫌のナポレオン……三二九
八　皇帝案内者ラコストに問う……三三四
九　意外事……三三六
十　モン・サン・ジャンの高地……三四〇
十一　ナポレオンに不運にしてブューローに幸運なる案内者……三四四
十二　近衛兵……三四六
十三　破滅……三四七
十四　最後の方陣……三五〇
十五　カンブロンヌ……三五一
十六　指揮官へは何程の報酬を与うべきか……三五三
十七　ワーテルローは祝すべきか……三五八
十八　神法再び力を振う……三六〇
十九　戦場の夜……三六二

第二編　軍艦オリオン

一　二四六〇一号より九四三〇号となる……三六九
二　二行の悪魔の詩が読まるる場所……三七一
三　鉄槌の一撃に壊るる足鎖の細工……三七六

第三編　死者への約束の履行

一　モンフェルメイュの飲料水問題……三八三
二　二人に関する完稿……三八六
三　人には酒を要し馬には水を要す……三九一
四　人形の登場……三九四
五　少女ただ一人……三九五
六　ブーラトリュエルの明敏を証するもの……四〇〇
七　コゼット闇中に未知の人と並ぶ……四〇五
八　貧富不明の男を泊むる不快……四〇七
九　テナルディエの策略……四二四
十　最善を求むる者は時に最悪に会う……四三三
十一　九四三〇号再び現われコゼットその籤を引く……四三六

第四編　ゴルボー屋敷

一　ゴルボー氏……四三八
二　梟と鶯との巣……四四三
三　二つの不幸集って幸福を作る……四四五
四　借家主の見て取りしもの……四四九
五　床に落ちた五フラン銀貨の響き……四五一
第五編　暗がりの追跡に無言の一組
一　計略の稲妻形……四五四
二　幸運なるオーステルリッツ橋の荷車……四五七
三　千七百二十七年のパリーの地図……四五九
四　逃走の暗中摸索……四六二
五　ガス燈にては不可能のこと……四六四
六　謎のはじめ……四六八
七　謎の続き……四七〇
八　謎はますます深くなる……四七三
九　鈴をつけた男……四七五
十　ジャヴェルの失敗の理由……四七七
『レ・ミゼラブル』について　辰野隆　四八七
解説　斎藤正直　四八八

レ・ミゼラブル　I

序

千七百八十九年七月バスティーユ牢獄の破壊にその端緒を開いたフランス大革命は、有史以来人類のなした最も大きな歩みの一つであった。その叫喊は生れいずる者の産声であり、その恐怖は新しき太陽に対する眩惑であり、その血潮は新たに生れいでた赤児の産湯であった。そしてその赤児を育つるに偉大なる保姆がなければならなかった。一挙にして共和制を覆して帝国を建て、民衆の声に代うるに皇帝の命令をもってし、全ヨーロッパ大陸に威令したナポレオンは、実に自ら知らずしてかの赤児の保姆であった。偉人の痛ましき運命の矛盾である。帝国の名の下に赤児はおもむろに育って行った。やがて彼が青年に達するとき、その保姆にはワーテルローがなければならなくなった。

「自由」とナポレオン、外観上相反するその二つは、実は一体の神に祭らるべき運命にあった。フランスの民衆はその前に跪拝した。彼等のうちにおいてその二つは、あるいは矛盾し、あるいは一致しながら、常に汪洋たる潮の流れを支持していた。そして彼等の周囲には、古き世界の伝統があった、伝統に対する奉仕者らが、神聖同盟の強力が。けれども彼等の心の奥には、パリーの裏長屋の片隅には、「自由」とナポレオンの一体の神が常に祭られていた。千八百三十年七月の革命は、また千八百三十二年六月の暴動は、底に潜んだ潮の流れの、表面に表われた一つの波濤にすぎなかった。

その動揺せる世潮の中を、一人の男が、惨めなる且つ偉大なる一人の男が、進んでゆく。身には社会的永罰を蒙りながら、周囲には社会の下積みたる浮浪階級を持ちながら、彼はすべてを避けず、すべてに忍従しつつ進んでゆく。彼の名をジャン・ヴァルジャンと言う。

ジャン・ヴァルジャンは片田舎の愚昧なる一青年であった。彼は一片のパンを盗んだために、ついに十九年間の牢獄生活を送らねばならなかった。十九年の屈辱と労役とのうちに、彼は知力とまた社会に対する怨恨とを得た。そして獄を出ると、彼が第一に出逢ったものは、すべてを神に捧げつくしたミリエル司教であった。そこに彼の第一の苦悶が生れる。神と悪魔との戦いである。苦悶のうちに少年ジェルヴェーについての試練が来た。彼は勇ましくも贖罪の生活にはいり、マドレーヌなる名の下に姿を隠して、モントルイュ・スュール・メールの小

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

都市において事業と徳行とに成功し、ついに市長の地位を得た。しかし彼の前名を負って重罪裁判に附せられたシャンマティユーの事件が起った。そこに彼の第二の苦悶が生れる。良心と誘惑との戦いである。彼は自ら名乗って出て、再び牢獄の生活が始った。しかし彼は巧みに獄を脱して、不幸なる女ファンティーヌへの生前の誓を守って、彼女の憐れなる娘コゼットを無頼の者の手より取り返し、彼女を伴ってパリーの闇黒のうちに身を隠した。そしてそこにおいてあらゆる事変は渦を巻いて彼を取り囲んだ。警官の追跡、女修道院の生活、墓穴への冒険、浮浪少年の群、熱情のマリユス、無為のマブーフ老人、ＡＢＣの秘密結社、ゴルボー屋敷、無頼なるテナルディエの者ども、少年ガヴローシュ、マリユスとコゼットの恋、千八百三十二年六月の暴動、市街戦、革命児アンジョーラ、下水道中の逃走、ジャヴェルの自殺、マリユスとコゼットとの結婚、ジャン・ヴァルジャンの告白。そこに彼の第三の苦悶が生れる。この世の有と無との戦いである。すべてを失った後、彼は死と微光との前に立つ。マリユスとコゼットとに向って彼は言う、「……お前たちは祝福された人たちだ。私はもう自分で自分がよく分らない。光が見える。もっと近くにおいで。私は楽しく死ねる。お前たちの可愛い頭をかして、その上にこの手を置かして下さい。」かくしてパリーの墓地の片隅の叢の中に、一基の無銘の石碑が建った。

何故に無銘であったか？　それは実に「永劫の社会的処罰」を受けた者の墓碑であったからである。一度深淵の底に沈んだ彼は、再び水面に上ることは、いかなる善行を以ってしてもこの世においては出来なかったのである。いや不幸なのは彼のみではなかった。種々の原因の下に「社会的窒息」を遂げた多くの者がそこにはいた。ファンティーヌ、テナルディエ、エポニーヌ、アゼルマ、アンジョーラ、ガヴローシュ、そしてまたある意味においてジャヴェル、その他多くの者が。ただこの世において救われた者は、マリユスとコゼットのみであった。なぜであるか？　彼等までも破滅の淵に陥ったならば、この物語はあまりに悲惨であったろうから。さはあれ、それらももはや一つの泡沫にすぎなかったのである。大革命とナポレオンとの二つの峰を有する世潮にすべてのものを押し流し、民衆はその無解決の流れのうちに喘いでいた。故に、ワーテルローの戦いと、王政復古と、千八百三十二年の暴動と、社会の最下層と、パリーの市街の下の下水道とが、詳細に述べられなければならなかったのである。

以上がこの物語の大よその内容である。

千八百四十五年四十四歳にしてヴィクトル・ユーゴーは、詩作の筆を折って政界に身を投じ、四十八年二月の革命以後しだいに民主的傾向に陥り、五十一年十二月ナポレオン三世によってなされたクーデターに対しては、熱烈なる攻撃を試み、ついに身の危険を感ずるや国外に逃亡したが、ついで公に追放せられた。彼は初めブラッセルに赴いたが、次にイギリス海峡の小島ゼルセーに行き、終りにゲルヌゼーに赴いた。その間、千八百五十八年より六十二年まで五年間の瞑想と思索とに成ったのがこの物語である。彼はその中に脳裏にあるものすべてを投げ込んだ。熱烈なる共和党員であった父より生れ、追放令を受けた老将軍と還俗した老牧師との家庭教育を受け、詩人としてはロマンティック運動の主将であり、政客としては民主派であり、主義よりも寧ろ熱情の人であった彼ヴィクトル・ユーゴーの脳裏に、最も鮮やかに浮んだところのものは、実に社会の底に呻吟するレ・ミゼラブル（惨めなる人々）であり、彼等を作り出した社会の欠陥であり、彼等が漂う時運の流れであった。そして彼等を描くにあたって、奔放なる己の想像と思想とに何らの抑制をも加えなかった。かくして出来た物語をさして、環境と群集との詳細な描写のゆえにゾラの真の源であるといい、また、空想的な筋の運びと類型的な人物とのゆえに全くのロマンティックの作であるといい、あるいは、青年マリユスをもって作者自身であるということは、この物語の価値に何かをつけ加えるものでもなくまた何かを減ずるものでもない。作者は何よりもまず詩人であった、人生の詩人であった。そしてこの物語は、千八百十五年より三十二年に至るフランスの叙事詩である。そこにおいては、愚昧な一老爺といえども、堕落した一売春婦といえども、みな古代英雄の如き光輝を放つ。この光輝は実に作者自身の光輝である。叙事詩であるがゆえに、作中の人物もある点まで作者によってその生命を保っていることは、あやしむに足りない。また作品中生のままの思想の多いことも、あやしむに足りない。

ワーテルローにおけるナポレオンの敗戦をもって、作者は神の意志によるものとした。訳者は今ジャン・ヴァルジャンの心の径路をもって、作者ユーゴーの意志によるものとするのである。

作者は人類を導く上帝の手が「自由」と「正義」とをさすものであると説いている。訳者も今ここにジャン・ヴァルジャンを導いた作者の意図が何であったかを説くべきであろう。しかし訳者は、あえて、それを賢明なる読者の判断に任したい。そしてただ作者の一言をここに

附記するに止めておく。すなわち、本書の如き性質の訳書も、「地上に無知と悲惨とがある間は、おそらく無益ではないであろう。」

千九百十七年　　豊島与志雄

改訳について

「レ・ミゼラブル」の翻訳を私が仕上げたのは、ずいぶん以前のことである。年少菲才の身をもって事に当ったので、意に満たぬ点が多々あった。しかるに今度改訂の機会を得て、旧稿に手を入れてみた。

翻訳の仕事の難事であることは言うまでもない。殊に、自由奔放にペンを走らしたと思える「レ・ミゼラブル」のような浩瀚なものについては、種々の困難が伴うものである。だが私としては相当の努力はしたつもりである。私が特に意を用いたのは、原文の調子を、気分を、なるべく保存したいということであった。そのため、時には、荘重ではあっても拮屈の嫌いがあるかも知れない。それは余儀ないことであった。「レ・ミゼラブル」は、世間で往々想像されてるような卑俗な作品ではなく、高遠な理想主義で一貫されてる作品である。

私はこの改訳をもって、自分の「レ・ミゼラブル」翻訳の決定版としたい。再訂の余暇を持たないだろうからである。そして巻頭の私の序文は、この作品に対する私の若き日の感懐の記念である。

なお、書中傍点附きのところは、原書にておもにラテン語もしくはイタリック字体となってる部分である。

豊島与志雄

序

法律と風習とによって、ある永劫の社会的処罰が存在し、かくして人為的に地獄を文明のさなかに拵え、聖なる運命を世間的因果によって紛糾せしむる間は、すなわち、下層階級による男の失墜、饑餓による女の堕落、闇黒による子供の萎縮、それら時代の三つの問題が解決せられない間は、すなわち、ある方面において、社会的窒息が可能である間は、すなわち、言葉を換えて言えば、そしてなおいっそう広い見地よりすれば、地上に無知と悲惨とがある間は、本書の如き性質の書物も、おそらく無益ではないであろう。

千八百六十二年一月一日

オートヴィル・ハウスにおいて

ヴィクトル・ユーゴー

第一部　ファンティーヌ

第一編　正しき人

一　ミリエル氏

千八百十五年に、シャール・フランソア・ビヤンヴニュ・ミリエル氏はディーニュの司教であった。七十五歳ばかりの老人で、千八百六年以来、ディーニュの司教職についていたのである。

彼がその教区に到着したころ、彼についてなされた種種な噂や評判をここにしるすことは、物語の根本に何らの関係もないものではあるが、すべてにおいて正確を期するという点だけでも、恐らく無用のことではあるまい。嘘にせよ真にせよ、人の身の上について言わることは、その人の生涯のうちに、特にその運命のうちに、往々実際の行為と同じくらいに重要な位置を占むるものである。ミリエル氏はエークスの高等法院の評議員のむすこであって、顕要な法官の家柄だった。伝えらるところによれば、彼の父は、彼に地位を継がせようとして、当時、法院関係の家庭にかなり広く行なわれていた習慣に従い、彼をごく早く十八歳か二十歳かの時に結婚さしたそうであるが、彼はその結婚にもかかわらず、多くの噂の種をまいたとかいうことである。脊は少し低い方であったが、品位と優美と才気とを備えた立派な男であった。その生涯の前半は社交と情事とのうちに費された。そのうちに革命となり、種々の事件が相次いで起り、法院関係の家柄は皆多く虐殺され、放逐され、狩り立てられ、分散してしまった。シャール・ミリエル氏は革命の初めからイタリーに亡命した。彼の妻は、そこで、長くわずらっていた肺病のために死んだ。彼等には子がなかった。それからミリエル氏の運命にはいかなることが起ったか。フランスの旧社会の瓦解、彼の一家の零落、千七百九十三年の悲惨な光景、恐怖の念を深めて遠くから眺むる亡命者等にとっては、おそらく一層恐ろしかったろうその光景、それらが彼の心のうちに脱俗遁世の考えを起さしたのであろうか。世の変動によってその一身や財産に打撃を蒙っても、あえて動じないような

人をも、時としてその心を撃って顫動せしむるあの神秘な恐るべき打撃が、当時彼が耽っていた娯楽や逸楽のさなかに突然落ちかかったのであろうか。それらのことは、誰も言うことは出来なかった。ただ知られていたことは、イタリーから帰って来た時、彼は牧師になっていたということだけであった。

千八百四年には、ミリエル氏はブリニョルの主任司祭であった。既に年老いていて、全く隠遁の生活をしていた。

皇帝の戴冠式のあったころ、何であったかもう誰もよく覚えていないが、あるちょっとした職務上の事件のために、彼はパリーに出かけねばならなかった。多くの有力な人々のうちでも枢機官フェーシュ氏の所へ彼は行って、自分の教区民のために助力を願った。ある日、皇帝が叔父のフェーシュ氏を訪れて来た時、この立派な司祭は控室に待たされていて、ちょうど皇帝がそこを通るのに出会った。皇帝はこの老人が自分を物珍らしげに眺めているのを見て、振り向いてそして突然言った。

「わしを眺めているこの老人は、どういう者か。」

「陛下、」とミリエル氏は言った、「陛下は一人の老人を見ていられます。そして私は一人の偉人を眺めております。私どもはどちらも自分のためになるわけでございます。」

皇帝はすぐその晩、枢機官に司祭の名前を尋ねた。そして間もなくミリエル氏は、自分がディーニュの司教に任ぜられたのを知って驚いたのであった。

ミリエル氏の前半生について伝えられた話のうち、結局どれだけが真実であったろうか、それは誰にも分らなかった。革命以前にミリエル氏の一家を知っていた家はあまりなかったのである。

ミリエル氏は、小さな町に新しくやって来た人がいつも受ける運命に出会わなければならなかった。そこには蔭口をきく者は極めて多く、考える者は非常に少いのが常である。彼は司教でありながら、また司教であったがゆえに、それを甘んじて受けなければならなかった。しかし結局、彼に関係ある種々の評判は、おそらく単なる評判というに過ぎなかったであろう、風説であり言葉であり話であって、南方の力ある言葉でいわゆる無駄口というのにすぎなかったであろう。

しかし、それはそれとして、九年間ディーニュに住んで司教職にあった今では、当初小都会や小人どもの話題となるそれらの噂話は、全く忘られてしまっていた。誰もあえてそれを語ろうとする者もなく、あえてそれを思い出してみようとする者もなかった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo